

倫理的ジレンマとは

日常のケアの場面で「これは何かへんだな」

「本当にこれでよいのだろうか」

「本当に利用者の方のためになっているのか」

などと直感的に感じる場面があります。

「これは倫理的な問題ではないか」という気づきが利用者の方へのケアの質をあげるきっかけとなります。

しかし、日常のケアの業務に埋もれて、私たちは、この簡単に思える倫理的気づきの余裕が意外とないのです。なぜなら、誰が見ても明らかに倫理的に間違っている問題だけでなく、

「どちらが正しく、どちらが間違っているのか」が

きりしない微妙な問題が日常のケアの場面にはたくさんあるからです。このような微妙な倫理的価値の対立を倫理的ジレンマといいます。

A さんの感想

多職種協働のケアの実践の前提には多職種協学があると思っています。しかし、医療のことなどに関し

ては共通認識をもとうとすればケア職はひたすら医療職を追いかけねばならず、それには疲弊と諦めが伴うものです。しかし「医療やケアにおける倫理」とい

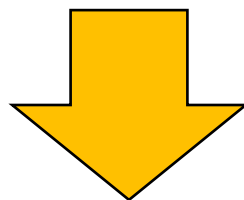
う視点は、医師にとっても看護師にとってもケア職にとってもまったく新しい視点で、横一線のスタートをきれる格好の協学の材料であると思います。倫理的ジレンマを意識することは、私達のケアや医療の質を高めるだけでなく、私たちの心のケアにつながることでありそうだという事です。利用者、又は職員間のやり取りをめぐって、もやもやしている感情が倫理的ジレンマとして整理することで府に落ちるものとなるような気がします。

食事における支援の重要性

当然、食事は人間が生きていくうえで必要なものです。

しかし、ただ食事から栄養素を摂取すればいいというものではありません。

大切なことは食事の摂取のありかたが問われるという事です。



認知症高齢者における食事の支援について考えてみましょう

食事における支援の重要性

①食べ合わせが難しくなる
(例：一品食べなど)

②食べ物への認知機能が低下する。

③体調に合わせて食べる量を調整することが
困難になる。

④食べ方がわかりにくくなる

⑤情緒の不安定により食事への集中が削がれ
ることがある。

①認知症の進行により、食事に関する理解力が
低下します。

②認知症高齢者の場合、理解力の低下により、
「食べものかどうか」の見極めが難しくなる方がいます。

③自分が「どのくらい食事を食べたか」を忘れる場合が
あります。(場合によっては食べたことを忘れる)

④箸やフォーク、ナイフ、スプーンなどが適切に使えなく
なり、「手づかみで食べる」という事が起こる場合があります。

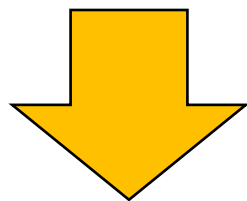
⑤何らかの不安や心配により、食事の際に集中して食べる
事ができない。

入浴における支援の重要性

「入浴」は身体的な「保清」を保つとともに疾患を予防するうえで重要な事柄です。

また、併せて入浴は精神的な安定ををもたらしてくれます。

ただ、一方で「入浴」は身体的負担感（ある程度体力を必要とします）を伴うことを忘れてはいけません。



認知症高齢者における食事の支援について考えてみましょう

入浴における支援の重要性

①お風呂で体を洗う事だけが入浴ではない。

②顔や頭に水がかかることへを嫌悪することがある。

③「入浴拒否」は必ずしも「入浴」が嫌いなわけではない。

④「入浴」の必要性が十分理解できないこともある。

⑤「入浴」の際の「裸」になることへの

⑥時には「一緒に入浴すること」も必要

①「安心感のある状態」が大切です。

②「お顔や頭」に水がかかること嫌いな方がおられます。あります

③「入浴」そのものが嫌いで「入浴拒否」していいわけではない場合もあります。

④理解力の低下がおこり「入浴」そのものの必要性が理解されないこともあります。

⑤「裸」になることは、極めて無防備な状態になることがあります。

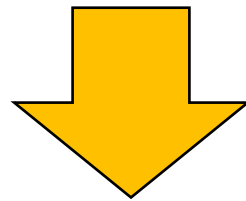
⑥上述したように入浴面、心理的な負担感が強いものでもあります。

排泄における支援の重要性

人にとって「排泄」という行為は心身の健康を保つ上で重要な事柄です

「排泄」が適切に行われなければ心身に様々な不調が起こってきます。

また、一方で「排泄」は羞恥心を伴う行為であるため、そのことに十分に配慮することが求められます。



一般高齢者にとっての排泄に係る支援の重要性について振り返っていきましょう。

排泄における支援の重要性

- ①失見当識のため、トイレの場所が不確かになる。
 - ②頻回なトイレ通い。
 - ③水分摂取を拒否することがある。
 - ④失禁や失便した下着等を隠すことがある。
 - ⑤自分で適切な下着等を選べないことがある。
- ①トイレの方向や場所、位置などの見当が低下し、行くべき方向が不確かになる。
 - ②記憶障害により、記憶が不確かになり、トイレに行った直後におまたトイレに行くといった行動をとります。
 - ③高齢期に至って失禁等の経験から水分摂取を抑える傾向が多くみられます。
 - ④認知症になっても羞恥心や恥ずかしさはきちんと残っています。
 - ⑤認知症になると判断力の低下や理解力の低下に伴い適切な下着などを選べなくなります。